

東北タイ農村における高齢女性と仏教 — 高齢社会に向けてのプロローグ —

Elderly Women and Buddhism in Rural Northeast Thailand:

A Prologue toward the Aged Society

加藤真理子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員）

【ねらいと目的】

タイでは急速に高齢化が進んでいる。すでに出生率の急速な低下は明らかである。そのため高齢化対策が進む日本などの先進国では、タイを含むアジアの高齢化現象を危惧する議論が起こっている。しかし高齢化の現状についての調査研究は進んでいるとはいえない。本プロジェクトでは、まず東北タイにおける高齢化の現状を把握することを目的としている。調査地である東北タイ農村では、子供の数が少なくなる一方で、教育費は高騰し、親はますます農業から他の現金収入の方法を求めようになった。特に長期出稼ぎの増加は、「家族」内の子供の養育や老親の扶養のあり方を多様化させた。子供を親に預けて出稼ぎに行く既婚女性が増え、「孫の世話があるから、寺に行けない」と語る高齢女性がみられるようになった。上座仏教国タイの女性にとって、結婚・出産を経て「家族」への経済的責務を果たした後、宗教実践に専念することが社会的に望まれる老後の過ごし方であった。同時にまた「家族」の存在は、高齢女性の生きがいでもある仏教実践を支える重要な要因である。本プロジェクトでは、孫の世話をする高齢女性に焦点を当て、「家族」との関係を同居、扶養、相続、家計の負担などから検討する。またそのような検討を通じて、高齢女性の人生や生活における仏教実践の位置づけやその変化について考察する。

【活動の記録】

2008年11月14日から2009年1月11日までの2ヶ月間、タイ国において臨地調査を実施した。

まずバンコクにおいて、チュラーロンコーン大学、タマサート大学等の附属図書館および農村の高齢者に関わる支援事業を行う公衆衛生省や文化省で、高齢化や高齢者問題についての文献収集を行った。次にすでに定着調査を実施したことがある東北地方コンケン県の一村落において悉皆調査を行うと同時に、高齢女性にインタビューを行った。

【成果の概要】

東北タイ農村において高齢女性と「家族」、および仏教実践との関係を明らかにするために、悉皆調査と高齢女性へのインタビューを行った。そのとき孫を養育する高齢女性に着目した。その結果、明らかになったことは以下である。

(1) 東北タイ農村の社会変容—近年、農村社会は世界市場の変化の影響を大きく受け、現金収入の必要性が増し、農業から都市や近隣村での賃金労働に生業が変化し、国内外での出稼ぎも増加した。その結果、村内では経済的な階層化が進んでいる。出稼ぎの常態化だけでなく、学童である孫を村に住む母に預け、夫婦で長期の出稼ぎに行く傾向もみられた。そのため村内の「家族」における高齢女性の役割も多様化していた。

(2) 高齢女性と「家族」との関係—宗教実践に積極的に参加し始める年齢でもある 50

代から 60 代の女性が孫の養育を担うようになった。高齢女性は孫の養育と引き換えに老後の扶養を期待しつつ、出稼ぎ先からの送金に依存し、伝統的な婚姻形態や居住慣習に支えられ、娘世帯の家屋が建ち並ぶ屋敷地内で養育が行っていた。

(3) 高齢女性と仏教実践—寺院通いや持戒行などの仏教実践に専念するためには、家事や田畑の仕事などの責務を任せる「家族」が必要である。しかし同居する孫の養育を担う高齢女性は、家を離れる仏教実践を行うことができない。高齢女性は、功德の獲得を現金の布施に代替することによって、寺に行かない形で仏教に関わっていた。つまり仏教実践を多様に解釈することによって、実践を継続させていた。「孫の世話があるので寺に行けない」という高齢女性の語りは、孫の養育と仏教実践の二者択一ではなく、変容する「家族」に対して自らが果たす役割があることを強調していた。母と娘関係を中心に広がる親密な関係のなかで、孫の養育を通じて自らの生活スタイルを社会変容に適応させようとする高齢女性の姿が明らかになった。